前川喜平さん「トークライブ」

「トークライブ前川喜平さんと考える「ひとりひとり」の学び～みんなと一緒に学びたい子も、みんなと一緒は苦手な子も。「ひとりひとり」が大事にされる、学びを考える」がリバティおおさか大ホールで開かれた。定員 270 名の会場は一杯であった。主催はあすわか（明日の自由を守る若手弁護士の会大阪支部）と大阪人権博物館（リバティおおさか)。同感することが多く、大いに勉強になった。

ライブは「みんなの学校」の話からはじまる。予告編が上映され、映画の感想が語られる。2016 年 12 月に名古屋市立大で「みんなの学校」上映会を開催したときを思い浮かべて、二人の感想に耳を傾けた。前川さんは、大阪市教育委員会のもとで大空小学校のような教育実践、インクルーシブ教育が行われてきたことを称賛する。

迫川緑さんは関西テレビで 2010 年から大空小学校の取材を開始し、長期取材を許される関係を作り上げ、映画「みんなの学校」の土台を築いた。足もとの地域から取材を続ける迫川さんは、障害をもつ子どもの教育の厳しい現実について、前川さんに鋭く迫る。二人のトークにより、前川さんの本音が聞けたようだ。

前川さんは 1979 年に当時の文部省に入省して、文部行政の一端を担ってきた。1979 年というと、私が名古屋市立女子短大に就職した年であり、わが教員生活を振り返りながら、前川さんの「文部官僚」としての歩みを考えてみた。前川さんは 2016 年に文部科学事務次官に就任し、翌 17 年 1 月に辞職した。官僚をやめてから自由に発言、行動できて楽しい毎日だと。とにかく引っ張りだこの前川さん。この日も夜は豊中で講演があり、朝日新聞によると約 1400 人もの参加者があったという。

トークは「養護学校義務化」から、障害児教育をめぐる文部行政へと展開する。前川さんは「就学免除」の規定はなくすべきだと。憲法 26 条は教育を受ける権利と義務を規定しているが、普通教育を受けさせる義務は国が負うべきものである。子どもたちの「学習権」を保障することが、なにより求められる。夜間中学の意義と実態、議員立法による「教育機会確保法」とフリースクールへと話題が広がる。最後に、みんな違って、みんな一緒に学ぶこと、それぞれの個性が生きる場としての学校の大切さを語る。

質問の時間があればと身構えていたが、残念ながら、その機会はなかった。質問したかったのは、先にレポートした「前川さん語る」で紹介した高校全入と適格者主義だ。今年度の愛知県の高校入試で、障害をもつ生徒が「定員内不合格」となったことを知り、ぜひ前川さんのコメントをもらいたかった。またの機会にしたい。

(2018 年 4 月 2 日)